「科学の目」が無実の人の冤罪を晴らす

警察官や刑事が主人公の映画や小説はいつの時代も人気ですが、近年はその「亜種」として、科学捜査官や科学者が犯罪を捜査する作品が目立つようになりました。本邦でもテレビドラマ『科捜研の女』が人気シリーズとなっており、天才物理学者が主人公の東野圭吾氏の小説「ガリレオシリーズ」も多くのファンを獲得、またアメリカでも『CSI: 科学捜査班』が15年にわたり放映されています。犯人が現場に残したわずかな遺留品から化学分析によって決定的な証拠を見つけ出す物語は、知的好奇心を満たしてくれるとともに、一般の人に知られざる捜査の裏側を見せてくれます。

「しかし実際の日本の警察、司法の現場では、科学捜査がきちんと機能していない現状があります。そのために少なからず冤罪が生まれているんです」

そう語るのは、甲南大学法学部の笹倉香奈教授です。筆者が笹倉教授のことを知ったのは、5年前の取材がきっかけです。笹倉先生は2011年にアメリカへ留学し、現地で「イノセンス・プロジェクト」という取り組みを知りました。イノセンス・プロジェクトは冤罪が疑われる過去の犯罪を、最新の科学で検証する非営利の活動です。その実績は目覚ましく、DNA鑑定などの化学分析で過去30年間に3000件もの冤罪を晴らしてきました。その中には確定死刑囚が21人も含まれており、約4割の事件で真犯人が見つかっています。

「日本の司法にも絶対にこの活動が必要だ」と感じた笹倉教授は、帰国後の2016年から日本版イノセンス・プロジェクトを開始し、弁護士、元科捜研の鑑識官、科学者などとともに、冤罪が色濃く疑われる事件の再検証を始めました。意外にも冤罪は、科学捜査が起因となって起こることがあるそうです。現在では個人特定の強力な武器となっているDNA鑑定も、使われ始めた80年代当初は非常に精度が悪く、それにも関わらず決定的な証拠として採用されたことで、足利事件など多くの冤罪を生み出したといいます。

火災現場を検証する燃焼実験においても、捜査官の誤解や誤った科学知識で冤罪が生まれています。「娘を火事で失った大阪の女性は、保険金目当ての放火殺人として有罪判決を受け、計20年も拘束・服役した後に科学的な検証で完全な冤罪と判明しました。彼女の名誉と失われた20年は取り返しがつきません」と笹倉先生から聞き、衝撃を受けました。

さらに驚いたのが「科学捜査の“証拠”を再検証用に保管することがルール化されていない」という事実です。科学の世界では、論文が発表されたら別の科学者が実験条件をそろえた追試によって検証するのが普通です。しかし日本の科学捜査の現場では、例えば覚醒剤の使用を試薬で確かめた後、残りの尿は捨ててしまうので、後からの追試が不可能なのです。過去に証拠として採用されたDNA鑑定の資料も、保存されていないために精度が飛躍的に高まった現在の手法による追試験ができないことが、冤罪を検証する上で大きな壁となっている事件もあるそうです。

「日本の刑事司法の大きな問題は、『自白』を重く見すぎていることです。密室の取り調べで捜査官に誘導され、虚偽の自白をしてしまうことは珍しくない。だからこそ捜査にもっと厳密な科学を取り入れるべきなのです」と教授は取材で語りました。

日本ではいったん刑事事件の被疑者になると、メディアもほぼ犯人と断定して報道します。しかし人も科学も間違える可能性は常にあります。科学によって冤罪が生まれ、無実の人に刑罰が科せられる事態は絶対にあってはならないことです。冤罪を防ぐためにも、市井の科学者たちはもっと刑事捜査に関心を持つべきではないでしょうか。きっとそれは、誰もが生きやすく、より正義に満ちた社会の実現につながっていくはずです。

大越　裕（おおこし ゆたか）
神戸在住。理系ライター集団チーム・パスカル所属。
大学研究者や経営者のインタビュー、ルポルタージュを『AERA』『Forbs JAPAN』などに執筆。

KOBELCO | 株式会社コベルコ科研
発行
コベルコ科研・技術ノート こべるにくす　Vol.31, No.56 APR. 2023　コベルコ科研「こべるにくす」編集委員会
本社 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-1　TEL (078) 272-5915　https://www.kobelcokaken.co.jp/
「こべるにくす」は(株)コベルコ科研の登録商標です。